

# 探訪 北の風景 43

## ソバ栽培日本一 上川管内幌加内町

青木和弘

「新そば祭り」を一週間後に控え、白いソバの花は盛りを終えようとしていた。山に囲まれた耕地はすべてがソバ畑である。栽培面積、生産量(収穫量)とも全国一だ。昼夜の、寒暖の差が大きい道北の気候はソバの栽培に適している。かつて幌加内では稲作が営まれていたが、1970年に始まったコメの減反政策によって、ソバが代替え作物になった。米に比べ収量は少ないが、手間がかからず短期間で収穫できる。コメからの転換を機に営農に見切りをつける農家が激増した。70年に7283人いた幌加内町の人口が、5年後の75年には40%もの2918人が減って4366人。さらにその後2835人が減って、本



年3月末で786世帯、1531人になり、北海道で一番人口の少ない町になった。

残った農家は耕地を広げ、品種改良や機械化・省力化を図り、ソバ栽培への特化に活路を見いだした。製麺原料として出荷するだけでなく、生産地で付加価値を付ける6次産業化に取り組み、ソバを特産化し、ブランド化する取り組みが始まった。その一つが、94年、幌加内町の知名度アップを狙って開催したイベント、「新そば祭り」である。本年度で24回目を迎えた。毎年、9月の第1土曜・日曜、町役場周辺の特設会場で開かれ、5万人を越える人々が訪れる。

今年も、道内外の16店がブースを構え、新そばを提供。その一つが、大人気の幌加内高校で、1500食を売り切った。同校は「全麵協素人そば打ち段位」の取得を卒業の目標にするユニークな教育で知られ、8月の全国高校生そば打ち選手権大会で、みごと優勝している。会場では、そば打ち講習会や、全国素人そば打ち名人大会、そば早食い大会、ステージショーなどが開かれ、名産品など90店も出店した。

かつて幌加内には鉄道があった。深川と名寄を結ぶ深名線で全長121.8キロメートル。1929(昭和4)年に幌加内駅が開業し、41年に名寄まで伸びた。80年代、乗降人員の少ない道内のローカル線が次々に廃線となる中、深名線は、「冬季の代替え交通がない」ことを理由に存続したが、



深名線「第3雨竜川橋梁」。雨竜川上流の「ボン・カムイコタン」渓谷に架けられた鉄橋。2009年に土木学会選奨土木遺産に認定されている

95年9月4日、道路の整備が進んだことからバス転換されて廃線になった。幌加内駅舎は2000年3月に火災で全焼したため残っていない。跡地に、わずかばかりの線路と案内板、庭石が残されている。線路は撤去されたが、沿線に鉄道遺構が保存されている。その一つが第3雨竜川橋梁である。この設置工事は新しい工法の難工事で、現場主任の渡部義雄氏が工事完成のその日、雪解け水の激流に転落して殉職している。その慰霊碑が傍らにある。駅舎では、ソバ畑に囲まれた築87年の旧沼牛(ぬまうし)駅の保存活動が活発に行われている。同駅舎は、そば打ち最高段位(全麵協・五段位)を持ち、農業を営む坂本勝之さんが、廃線後に譲り受け、20年にわたって保存してきた。沼牛駅はかつて、「下幌加内地区の玄関口」として栄えた。同町の平和地区から運ばれてきたクローム鉞や、粘土などを道内外へ搬出した。



見渡す限り白い花のソバ畑が広がる幌加内町。栽培面積は3440ha、収穫量2550t(2016年)はダントツで日本一である

そんな折、1935年に建築された旧池北線の「上利別駅」が解体されることがわかり、その希少な部材の一部をもらい受け、沼牛駅の改修に再利用することになった。

駅舎保存に集まった20代から30代の若者たちが「おかえり沼牛駅実行委員会」を結成。「北海道の豪雪地帯で、87年の歳月を経た木造駅舎『沼牛駅』。広大な大地の中、役目を終え静かに佇み続けるその姿は、北海道の鉄道の歴史を語る上で重要な存在です」と修繕費の寄付をインターネットで呼びかけ、172人から239万円が集まった。自分たちで屋根や外壁、窓を修理し、内装も当時を再現するように改修した。



ソバ畑に囲まれた旧沼牛駅が旧池北線の利別駅の解体資材を再利用して修復されていた

1回目の公開イベント「おかえり沼牛駅」は2015年7月に開き、地元住民や鉄道ファンなど約800人が訪れた。その後も毎年イベントを開催している。

晴れた夜、沼牛駅は降るような星空に包まれ、真上にくっきりとした銀河が架かる。白い花が一面に咲き誇るソバ畑から、渦巻くように天を駆ける長大列車の姿を思い浮かべてみた。